

患者・家族・多色種共同型全人的ケア拠点の実現

—学生主体のコミュニティ拠点の展開—

(代表) 大久保 咲貴	(医薬保健学域保健学類看護学専攻 3年)
山越 麻美	(医薬保健学域保健学類看護学専攻 3年)
野崎 智恵	(医薬保健学域保健学類看護学専攻 2年)
堂道 香織	(医薬保健学域保健学類看護学専攻 2年)
溝口 薫	(医薬保健学域保健学類看護学専攻 4年)
丸山 佳苗	(医薬保健学域保健学類看護学専攻 4年)
臺藏 綾霞	(医薬保健学域医学類 4年)

指導教員

榊原 千秋 (医薬保健研究域保健学系地域・環境保健看護学分野 助教)

1. 背景

昨今の保健・医療を取り巻く現状を見ると、医療費定額支払い制度などの導入により、入院日数が短縮化され、入院治療から在宅医療へますます加速化している。また、地域全体で患者・家族を支援する「地域包括ケア」に重点が置かれ、在宅医療においてはチーム医療・ネットワーク化が重要とされている。さらに、患者を全人的に捉える医療への取り組みが求められている。これらのことより我々は、当事者の声に耳を傾けることが重要だと気づき、聞き書きへの取り組みを始めた。

さらに聞き書きの活動を通じて、患者や家族と医療保健福祉従事者が横並びで出会うことができる空間とケア方法の確立の必要性を感じた。2010年には初の試みとして、医学展にてココチカフェを学内で試創した。その結果、患者・家族・市民・医療保健福祉従事者・学生（総称して多色種と呼ぶ）が相互に一人の生活者として出会い、語り、学び合うことができる多色種のコミュニティネットワークの拠点となること、地域におけるピアエンパワメント及びコミュニティエンパワメントの拠点となる可能性について示唆を得た。

これらの経験から2011年度は、学生が主体となって多色種に働きかけ、共に学び・考え・創り上げる「かたち」を模索し、そして、コミュニティの共同拠点としてのココチカフェを地域で実現し展開していきたいと考えた。

2. 研究目的

学生が主体となって、患者・家族・市民・医療保健福祉従事者に働きかけ、患者・家族・多色種共同型全人的ケア拠点として、地域においてコミュニティ拠点ココチカフェを展開する。コミュニティ拠点の実現にあたっては、地域の独自性を活かした、患者・家族・市民の視点に立ったものとする。

3. 研究方法

まず、ココチカフェの活動拠点となる地域のアセスメントとココチカフェの利用者となる医療保健福祉従事者のニーズ調査を行うため、金沢南在宅医療推進会議のワークショップに参加した。ワークショップでは、地域の包括的なケアや身近に気軽に何でも相談できる、顔の見えるネットワークづくりが地域には求められていることを学んだ。これらによってココチカフェが地域に果たせる役割の示唆を得た。また、ココチカフェの利用者となる患者・家族のニーズ調査を行うため数人の患者・家族の方にインタビューを行った。インタビューを行うために聞き書き講座に参加し、患者・家族の思いやニーズを引き出す方法を学んだ。

これらにより学んだことを生かして、地域にてココチカフェを5回開催した。ココチカフェ実施後は、各回の評価を行ない次回に向けた改善案を検討した。

4. 研究成果と考察

研究成果

2009年に開催された「金沢1日マギーの日」の講演会に参加し、イギリスある「マギーセンター」というがん情報支援センターを実際に利用された乳がん患者の体験を聞いた。また、2010年には島根県にあるがんサロン「ちょっと寄ってみません家」を実際に見学し、空間や来所者への実際を学んだ。ココチカフェの運営方法について、マギーセンターとがんサロン「ちょっと寄ってみません家」のコンセプトを参考に検討した。

1) マギーセンターについて

マギーセンターとは、イギリスにある病院の敷地内におかれたがん情報支援センターのことである。マギー・ケズウィック・ジェンクスという女性ががんを告知され、治療や介護を受けた祭の自身の体験から、病人ではなく一人の人間に戻れ、「死の恐怖の中で生きる喜び」を再発見できる、小さく家庭的で安心できる場所が欲しい、という思いを抱いた。そして彼女が亡くなった後、その思いを受けてマギーセンターがイギリスの病院の敷地内に設立された。マギーセンターのコンセプトは、第二の我が家のような空間であり、信頼のおける多職種のスタッフがいて、いつでも悩みを相談したり情報を得たりすることである。対象となるのはがん患者やその家族、友人であり、全て無料で利用可能である。マギーセンターでは空間の設計が重要であるとされており、自然光が入って明るい空間であること、安全な庭があること、オープンな空間であること、セラピー用の個室があることなどがある。

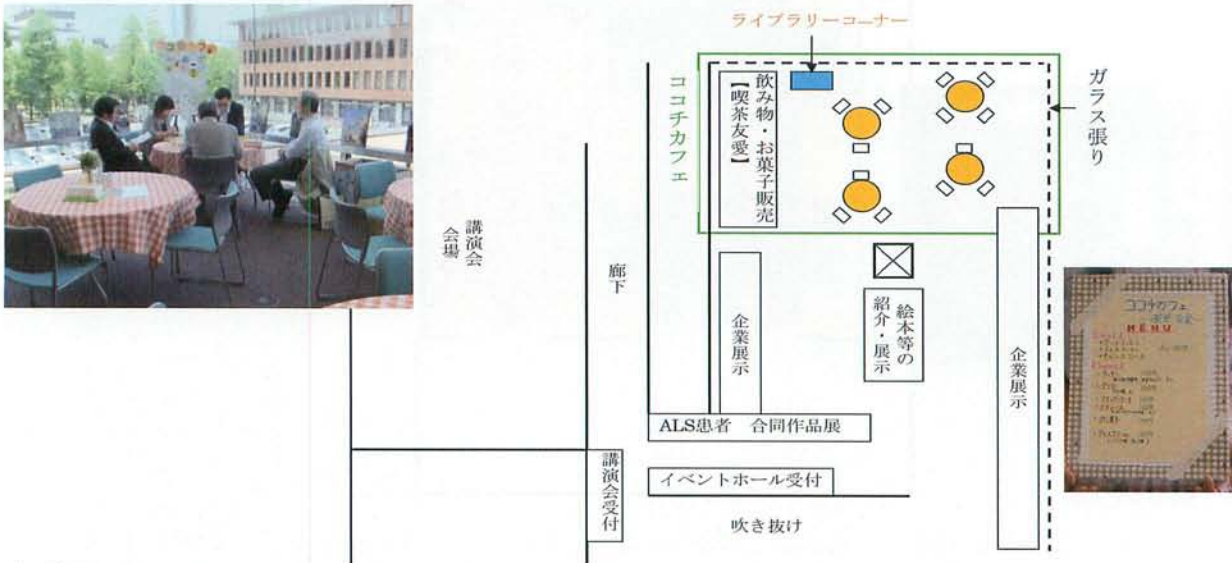
2) がんサロンについて

がんサロンとは、がん患者や家族がお茶を飲みながら悩みや情報を共有する場である。患者・家族、医療、行政、議会、企業、教育、メディア、宗教学、建築学、人生学が「十位一体」となって連携し、人と人とのつながりを大切にしたいネットワークをつくる場としての機能を持つ。がんサロンのコンセプトは、利用する患者・家族にとってがんサロンは、自分の思いを表出して生きる元気を取り戻すことができる場である。

さらに、ワークショップやインタビュー調査の結果を踏まえて多色種が交流を持てる場を提供するべく、ココチカフェを計5回開催した。

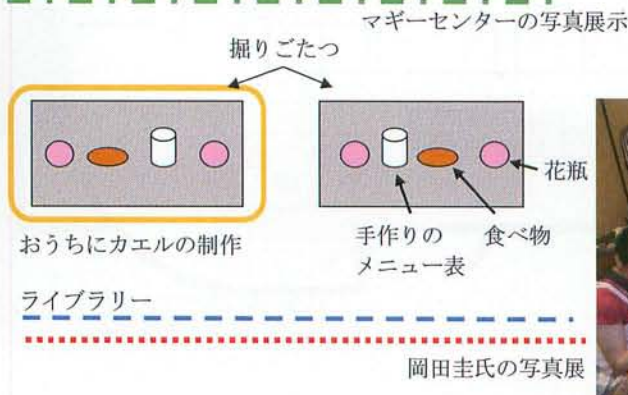
3) 第1回ココチカフェ

6月19日に金沢しいのき迎賓館で行われた講演会「生きるセンス 食べるセンス 出すセンス」に併設する形で行なった。いのち、食、排泄に関する講演会があり、展示コーナーが開設された。医療保健福祉従事者や市民など、参加者は約150名だった。ココチカフェの設営にあたっては、2面がガラス張りで庭が眺められるというマギーセンターのコンセプトを取り入れた。各テーブルは丸いテーブルとし、講演会に参加する前後に立ち寄りやすいオープンな空間にしたことにより、思いを表出しやすい場となった。その他にも、太陽の光を存分に取り入れたくつろぐことの出来る温かい空間に、がん患者向けのパンフレットや手作りのメニュー表・飾り付けた花瓶・本を置いた。



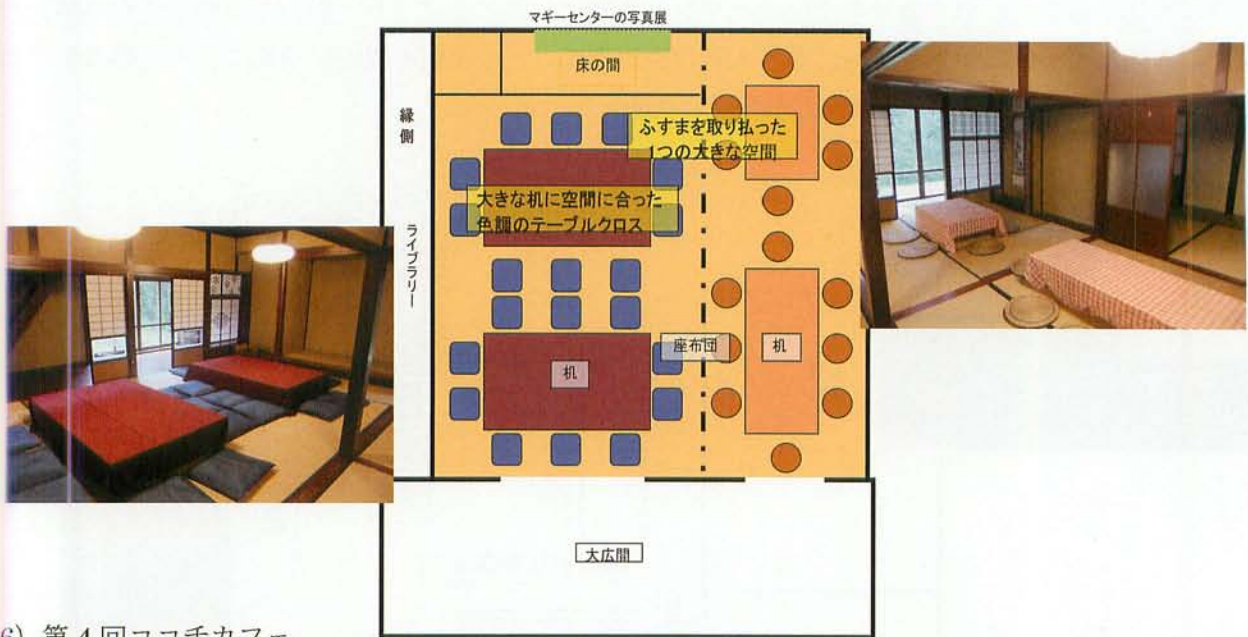
4) 第2回ココチカフェ

9月4日に金沢市の国際交流サロンで行なわれた「金沢1日マギーの日」というイベントに併設する形で開催した。このイベントは、ココチカフェが目指しているイギリスのマギーセンターをぜひ石川にもつくりたい、という思いを持った方たちが集まって開催した。イベントを行なった会場は伝統的な日本家屋であり、マギーのコンセプトと同様、窓からは季節感のある庭を眺められる。マギーのコンセプトに沿って、最大10人が座れる大きなテーブルを活用し飲食物を無料で提供したことによって、参加者間の交流が生まれた。片方の机では「おうちにカエル」というぬいぐるみの製作を、同じ空間で行なった。製作を共に行なうことによって、初対面の参加者でも緊張感が解けて話しやすい空間を安心感が生まれ、初対面の人同士でも気兼ねなく話しかけられる場となった。



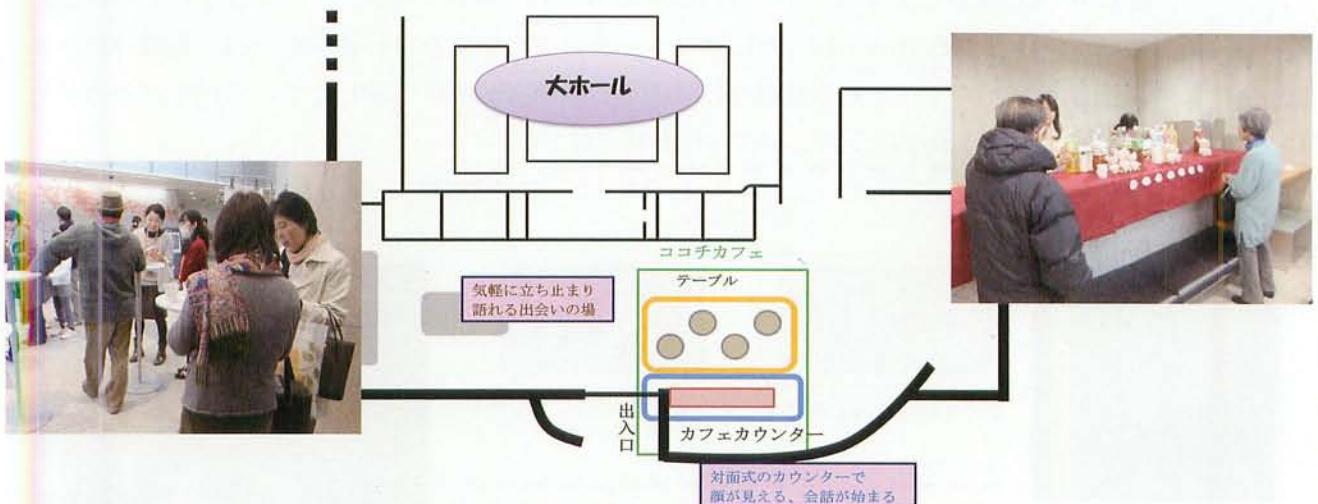
5) 第3回ココチカフェ

10月16日に湯涌にあるかなざわ湯涌創作の森で「きのう きょう あしたの会」という、聞き書き学校やこことほぐしコンサート、講演会に併設する形で行なった。この会には、医療保健福祉従事者、患者・家族の約100名が参加した。ふすまを取り払い、参加者一同が集える大きな空間を設営した。和の空間に合わせた色調のテーブルクロスを最大10人が座れる大きな机に広げた。この空間を食卓として共に参加者が囲むことにより、参加者相互の交流が生まれた。がんサロンのコンセプトを取り入れ、飲食したり、前回と同様にぬいぐるみの製作を行なったりして、くつろぐことのできる空間とした。



6) 第4回ココチカフェ

3月18日にこまつ芸術劇場うららにて、「魂のいちばんおいしいところ」というコンサートが開催され、その会場の一角にてココチカフェを設営した。マギーのコンセプトを目指すため、オープンな空間とし対面式のカウンターを活用した。立ったまま飲食出来るテーブルの設置により、気軽にココチカフェに参加し自然とコミュニケーションが生まれる空間となった。これまでに行ってきた全3回のココチカフェの活動をまとめた記事を展示し、参加者の方々とカフェのコンセプトについて語り合い理解してもらおうきっかけとした。



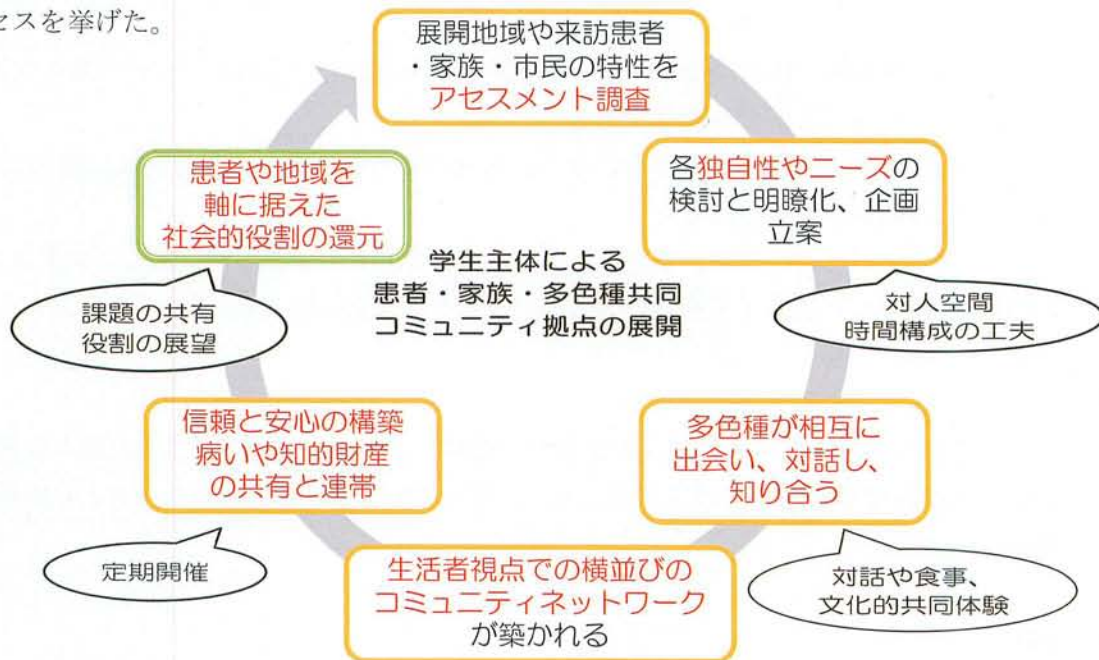
7) 第5回ココチカフェ

4月15日に金沢赤十字病院にて、“がん患者の就労”をテーマとしたがん哲学講演会と併設する形で
行なった。大テーブルではそれぞれ飲食し、対話できる場とした。また、ライブラリーコーナーには、
闘病記やがん患者向けのパンフレットや絵本を設置し、マギーに倣いカフェに誰もが参加しやすい空間
を設営した。また、講演会のテーマからがん患者や家族の参加が多かったこともあり、カフェで学生も
患者の声を直接お聞きすることができた。



考察

「学生主体で、患者・家族・多色種共同のコミュニティ拠点を展開することの意義」を考え、以下の6つのプロセスを挙げた。



- 1) 展開地域や来訪患者・家族・市民の特性をアセスメント調査する
- 2) 各独自性やニーズを検討・明瞭化し、対人空間の工夫を踏まえて企画・立案する
- 3) ココチカフェにて対話や食事、文化的共同体験を行なうことによって、多色種が相互に出会い、対話し、知り合う

- 4) 生活者視点での横並びのコミュニティネットワークが築かれる
- 5) 定期開催することで信頼と安心が構築され、病いや知的財産の共有・連携がとれる
- 6) 課題の共有により、患者や地域を軸に据えた社会的役割が地域に還元される

この手順を繰り返し踏むことで、まず地域の患者・家族・市民・医療保健福祉従事者が関心を軸に互いに出会い、横並びのパートナー関係を持つピアエンパワメントが築かれる。続いて、生活者の視点を持ったコミュニティネットワークが構築され、更には地域の課題の共有と連携となるコミュニティエンパワメントが築かれる。最終的に、このような循環がらせんを描きながら地域へと拡大していくことで、各人が患者・家族の声や地域社会環境を軸に据えた全人的地域創造が図られ、社会の資産（ソーシャルキャピタル）になると考える。

5. ココチカフェの特徴と展望

ココチカフェは、学生が患者・家族、医療保健福祉従事者と共に企画・運営することによって、学生と患者・家族、医療保健福祉従事者が一人の生活者として互いに出会い・語り合い・学び合うことができる場である。さらに、聞き書きをベースに当事者の語りを大切にしたコミュニティ拠点である。ココチカフェの空間は、大テーブルやライブラリー、庭が見える空間の演出など、参加者が語りやすい多彩な空間である。講演会と併設することにより、より気軽に参加しやすい。

これらの特徴によって、ココチカフェは参加された方にとって「自分の存在が肯定できる」居場所として今後発展していくことが示唆された。

6. 結論

- 1) ココチカフェは、多色種（患者・家族・市民・医療保健福祉従事者・学生）がそれぞれの立場を離れ、人として出会い、語る場である。
- 2) 同カフェの存在により、人々が顔なじみとなり、悩みを打ち明けられる場を地域に持つことができ、安心感、心の充足感がもたらされる。
- 3) 地域におけるネットワークの構築、多色種が互いに情報を共有し合う事が出来るココチカフェは、学生主体で地域に根差した患者・家族への全人的ケアを行う重要な拠点となる。

7. 謝辞

本研究を進めるに当たり、ココチカフェの主旨をご理解、およびご協力くださった様々な患者さま・ご家族・市民・医療保健福祉従事者の皆さま、また、厚くご指導くださいました金沢大学榊原千秋先生に心より感謝申し上げます。

8. 参考文献

- 中村裕美子ほか（2012）『地域看護技術』医学書院
- 大木幸子（2010）「コミュニティ・エンパワメントのための援助技術」『保健師ジャーナル』Vol.66 No.07 pp.660-661
- 尾島俊之（2011）「ソーシャル・キャピタルと地域保健」『保健師ジャーナル』Vol.67 No.02 pp.96-100
- ミルトン＝メイヤロフ（田村真・向野宜之訳）（2005）『ケアの本質 生きることの意味』ゆみる出版